

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | サルトルのBaudelaireにおける詩人の成功と失敗：《La Chambre double》と《Mon Cœur mis à nu, XI (19)》の解釈を中心に |
| Author(s) | 重見, 晋也 |
| Citation | フランス文学, 21 : 9 - 17 |
| Issue Date | 1997-06-01 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041014 |
| Right | |
| Relation | |



サルトルの *Baudelaire* における詩人の成功と失敗

—《La Chambre double》と《Mon Cœur mis à nu, XI (19)》の解釈を中心に—

重見晋也

序

サルトルの批評作品が、他のジャンルの作品に比肩するものであることは広く認められているところである。*Baudelaire*¹⁾は、後に発表される *Saint Genet* や *L'Idiot de la famille* に先立つ作品として、いわゆる「実存的精神分析」の手法の最初の実践として位置づけられるにも拘わらず、これまで省みられることが少なかった作品である。それはあたかも、作品の出版直後に発表された4人の批評家たち、すなわちバタイユ、ブラン、ブランショそしてリシャールのサルトル批判によって²⁾、すべてが言い尽くされたかのようなのである。サルトルのボードレー論は、1946年にボードレーの *Écrits intimes* への序文として発表され、それが1947年に *Baudelaire* というタイトルで独立して出版されたものである。作品の出版年をサルトルの著作の中に位置づけてみると、それはちょうど、*L'Existentialisme est un humanisme*, *La Putain respectueuse* が出版された年であり、さらには、サルトルが様々なジャンルの批評を旺盛に執筆していた時期に当たる。また、本来序文として出版されたため、作品中に引用される書簡の選定にあたっては、サルトルと編集者との話し合いによって決定された³⁾、という経緯がある。しかしその一方で、ボードレーのテキスト自体からの引用に関してはそうした事実は確認されていない。

そこで本論においては、ボードレーの作品、《La Chambre double》と《Mon Cœur mis à nu, XI (19)》についての解釈をめぐって、前述した4人の批評家たちの論における解釈とサルトルの解釈とを比較し、サルトルのボードレー論を再考する。

I. 批評家たちのボードレーのテキスト解釈

まず《Mon Cœur mis à nu, XI (19)》について、批評家たちの解釈を考察する。このテキストはバタイユとブランによって引用され解釈を提示されている。

バタイユの《Baudelaire》は、サルトルの言説を引用しつつ反駁するという手法を用いている。例えば、バタイユはボードレーの悪についてのサルトルの考察を取り上げ、サルトルが悪と詩との関係を十分に理解していないと指摘する (BATAILLE, p. 190)。バタイユにとって詩とは、それ自身として矛盾を抱えたものであり、破壊の運動性を持ちつつも

創造的統一性を目指すものであるとされる。そこから、そうした詩の矛盾性を当時の社会的要請に求め、経済的観点からこの要請を立証しようとする。

こうした立場に立ちつつ、ボードレールの《Mon Cœur mis à nu》からの次の一節を引用しつつバタイユが主張するのは、確かにボードレールは自分の創作活動に満足することがなくそれ故に怠惰に陥ったかのように見えるが、そうした無力感こそがボードレールの生を特徴づけるものであるという点である。

Il y a dans tout homme, à toute heure, deux postulations simultanées, l'une vers Dieu, l'autre vers Satan. L'invocation à Dieu, ou spiritualité, est un désir de monter en grade; celle de Satan, ou animalité est une joie de descendre.

(BAUDELAIRE, pp. 682-683; BATAILLE, p. 203.)

さらにバタイユは、ボードレールが「快樂と仕事」を選ばねばならないと述べた別の一節⁴⁾を引用している。そして「神」と「仕事」、「サタン」と「快樂」とを同一なものを見なす。すなわち、「仕事」とは「財力」の増加であり、「快樂」とは「財力」の「蕩尽」である。バタイユはさらに論を推し進め、「仕事」とは未来を心配することであり、有益で満足をもたらすものであるが、それとは反対に「快樂」とは現在を気にかけることであり、無駄で不満しか残さないとする。バタイユはこのようにして、この一節に「仕事」と「快樂」という二つの選択肢の間で揺れ動くボードレール像を読みとっている。

バタイユと同じ一節をブランも引用している (BLIN, pp. 131-132)。ブランによる *Baudelaire* 批判は、非常に辛辣なものである。ブランはサルトルの論を要約しつつ、サルトルがボードレールの詩を理解していないわけではないことを確認し、この論が「実存的 精神分析」の見事な実践になっていると一応評価してはいる。しかし第3章において、ブランはサルトルの論が読者の反感をかう「不当な論告文」(BLIN, p. 123) であると指摘し、そのようなサルトルの裁判官のごとき強い態度を、詩と詩人に対する無理解に起因するものであるととらえている。

ブランによれば、サルトルは詩人を伝統的な規範の擁護者であったと見なし、その受動性を批判しているが、それは誤解である。むしろボードレールの実践の各々が、自由な実践の結果なのであり、サルトルが指摘するような詩人の受動性に還元されるものではない。そして、ブランはそうした考察の方法自体が、ボードレール解釈をゆがめるものであると批判し、そこからさらに、サルトルのボードレール論と存在論との矛盾を指摘する。

こうした立場から、ブランはサルトルが引用した上の《Mon Cœur mis à nu》の一節を解説している。ブランにとってここに述べられた「二つの嘆願書」とは、神とサタンとの

間に挟まれた人間の道徳的かつ神学的葛藤の表現である。ブランはこうした解釈に基づき、サルトルがこの詩人の言葉に、存在することと現実存在することの極性を見ている点を批判する。むしろ、ブランにとっては、ボードレールにおける神とサタン、つまり善と悪とは切り離せない関係にあるのだ。そして、自らのうちにある悪を打ち破ることによってのみ善の方へと歩みを進めることができる以上、このボードレールの一節において問題となっているのは、サルトルの指摘するように絶対的に善を目指すことではなく、善と悪との葛藤自体であると解釈している。

以上のようにバタイユとブランによるサルトル批判を見てくると次のようなことが言える。すなわち、バタイユが神とサタンとの問題を、「快楽と仕事」との問題に還元し、さらにその問題を彼独自の社会・経済的観点からとらえようとしているのに対して、ブランの方は、そこに道徳的かつ神学的な人間の葛藤を見いだしている。この点で両者は異なっている。しかし、神とサタンとに挟まれた人間に、詩人自身の生の葛藤を認めているという点では共通しているのである。そして、両者ともに、各々の作品においてボードレールの詩人としての成功を擁護しようとしているのである。

次に、《La Chambre double》についての批評家たちの解釈を見てみよう。この詩はブランショとリシャールが引用している。

まずブランショを取り上げる。ブランショがその《L'Échec de Baudelaire》において明らかにしようとしているのは、歯に衣を着せずボードレールの生の失敗を語ったサルトルのボードレール論とは反対に、サルトルの提示する詩人の失敗した生においてこそ、「ボードレールが *Les Fleurs du Mal* にも値した」(BLANCHOT, p. 133) ことを示すことにある。そのうえでブランショは、詩的に生きようとしながらもそれが不可能であることを詩人自身が認識するがために、創造を通して自らの理想を追い求めているのだと、ボードレールの生を見なし、この矛盾した運動性を《Le Gouffre》という作品に見いだしている。それは、詩自体が内包している一つの全体性へと向かう決して到達することのない終わりのない運動であり、こうした矛盾のうちにボードレールの成功を見いだしている。

こうした観点からブランショは、《La Chambre double》が示しているのは、時間が止まり永遠によって支配されている詩的純粹さの象徴としての部屋であり、そしてその部屋の精神性を崩壊させる不純さとしてのノックの音だ (BLANCHOT, p. 144)、と考える。換言すれば、この詩に描かれているのは純粹さと不純さとの等価性、すなわち純粹さの幻想によって卑近さが覆い隠されているさまである。さらにそれは幻想としての詩の在り方自体を示しており、そうした幻想が詩の成立条件となっているとされる。すなわち、ボードレールの生における矛盾した運動性は、この詩にも反映されているのである。そして、こうした運動性は、詩人の生きざまであるとともに詩を詩たらしめているものだとされる。

一方リシャールは、ボードレールにおける「深淵 (gouffre)」というテーマを取り上げ、ボードレールの詩における二重性とそれを総合する運動性を考察することによってボードレールの成功を明らかにしようとする。リシャールはボードレールの「深淵」を象徴するテーマの一つとして「埋もれた宝 (le trésor enterré)」を指摘し、それを詩人からは隠されているが見いだされるべき真実であるとする。しかし、《La Vie antérieure》に描かれているように決してその真実には到達することができないがために、そこからボードレールのな夢想と、空間的にも時間的にも終わりのない真実の探索が始まるのだとされる。「光輝 (splendeur)」のテーマはそうした真実の象徴であり、それは過去と未来や光と陰といった対立概念を解消するような運動性をそれ自身に持っている。そうした運動性は幾つか指摘されているが、その中でもリシャールが重要視しているのが「唯一のアリアドネの糸」(RICHARD, p. 151)と形容されている「螺旋 (spirale)」(ibid.)の運動である。

《La Chambre double》にリシャールが読みとるのも、以上に述べた「光輝」のテーマにおける二重性の運動性とその調和である。リシャールにとって「光輝」とは、「二つの敵対する要請の間の均衡」(RICHARD, p. 105)であり、それはこの作品に描かれた「十分な輝きと調和のとれた心地よい暗さ」⁵⁾としての享樂的なバラ色である。また、運動性という観点からいえば、詩に描き出されている、享樂の絶頂から恐怖への突然の転落、そして後悔としての過去と欲望としての未来との間のゆらめきをリシャールは見ている。それは後悔と欲望とを挟んで時間という軸の周りをめぐる螺旋運動であり、ボードレール自身の逡巡を示しているとされる。

このように、ブランショにしろリシャールにしろ、《La Chambre double》という作品に、二つの対立概念とそれを解消しようとする運動をみていることになる。確かに、ブランショが詩に描かれた部屋の二重性を詩論の問題に結びつけるのに対して、リシャールが二重性の運動性を重視している点では異なっているものの、両者とも対立する概念が等価なものとしてこの部屋に反映されていると解釈する点においては一致している。そして両者ともがこのようにして、ボードレールの詩人としての成功を確認しようとしているのである。

II. サルトルのボードレールのテキスト解釈

それではこれら2つのボードレールのテキストについて、サルトルはどのように解釈しているのだろうか。

サルトルがボードレール論で行っているのは、論の冒頭に示されているように、「その人の人生は彼にふさわしいものではなかった」(p. 17)というマキシムをボードレールに当てはめ、ボードレールの生の失敗を検証することである。また、ブランも指摘していた

ように、サルトルの論全体は「実存的精神分析」と呼ばれる手法の実践となっており、幼少期の「根源的選択」という契機に着目した考察は、論の前半において大きな位置を占めている。結論においては、ボードレールの人生が彼に十分ふさわしいものであったとされる。しかしそう述べられるのは、詩人の人生が、他者のまなざしを前に自らをモノ(chose)にしてしまうような受動的態度によって特徴づけられていることや、自分と他者との差異を認識しつつもその差を埋めようとする詩人の空虚な努力に見られるように自己欺瞞的であることなどが示された後である。サルトルはボードレールのこうした態度を「悪循環」(p. 79)⁶⁾として提示する。こうした「悪循環」の運動性をサルトルは詩においても考察しており、それをボードレールにおける「自然」のテーマであるとか「冷たさ」のテーマなどに認めている。すなわち、ボードレールの生と作品とは、対立する二つの選択肢を前にした詩人のためらいによって特徴づけられているのである。

ところで、《Mon Cœur mis à nu, XI (19)》は、*Baudelaire* に2度にわたって引用された詩人の数少ないテキストの一つである⁷⁾。最初の引用は、詩人における「無限(infini)」のテーマについての考察の後に示される。ボードレールにおける「無限」とは、「示唆され、現前しつつも不在であるような現実存在」(p. 37)であって、サルトルはそうした特徴を《L'Invitation au voyage》や《Le Confiteur de l'artiste》に認めている。またこの「無限」という概念は、「超越」や「不満足」といった概念と同じであり、それらは一様に人間が「二つの対立する力の実践の結果生まれてくるある緊張関係であり、そのどちらともが人間性の破壊を目指す」(p. 38)ものであるとされる。すなわちそうした緊張関係こそが、サルトルの考える神とサタンに対するボードレールの「二つの嘆願書」である。サルトルはパスカルを引用し次のように続ける。

Lorsque Pascal écrit que «l'homme n'est ni ange ni bête», il le conçoit comme un certain état statique, une «nature» intermédiaire. Ici rien de tel: l'homme baudelairien n'est pas un état: c'est l'interférence de deux mouvements opposés, mais également centrifuges dont l'un se porte vers le haut et l'autre vers le bas. [...] deux formes de la transcendance que nous pourrions nommer, après Jean Wahl, transcendance et transdescendance. (SARTRE, p. 38)

このように、ボードレール自身が語る神とサタンへの「二つの嘆願書」というのは、パスカル的な「一つの安定した状態ではない」のであって、《transcendance》と《transdescendance》という二つの超越的運動性としてとらえられている⁸⁾。すなわち、ボードレールの生は、神とサタンという形而上的次元において運動する「緊張関係」を示してい

るとされるのである。

次に、《La Chambre double》についてであるが、サルトルは、論の結論部においてボードレールの根本的に「懐古主義」的な態度を述べる際に、この詩を引用する (p. 157)。サルトルは、「懐古主義」とは自由から逃れようとする試みであるとした上で、ボードレールにおいても、過去を振り返ることによって現在の自由を制限しようとする態度を示しているとする。サルトルによれば、ボードレールにおいて特徴的なのは、時間の経過に対する恐怖である。サルトルはそうした恐怖心に流れる血に対する詩人の恐怖とのアナロジーを認めている。それ故、流れる時間は二重の意味での《le temps perdu》、すなわち過去の「失われた時間」であるとともに、現在の「無駄に費やされている時間」をも示すことになる。そうした点からサルトルはこの詩の中に、「内面世界の半透明の冥府」すなわち過去と、現在との同居を見ているのである。つまり作品の最後において発せられる時間の声（「われは生、耐え難く、抗し難き生なり！ [...] 生きるが良い、地獄の亡者よ！」）は、現在の生活からの脅迫であると同時に、過去に対する後悔でもあるというように、二重性に特徴づけられたものとして考察されている。そこからさらにサルトルは、ボードレールにおける「過去」の概念にふれ、ボードレールが「現在を意識する過去であること」 (p. 158) を選びとったのだと述べる。すなわち、完全に懐古主義的な態度をとるのではなく、常に過去を向きながらも現在にも関心を払うような、あるいは *Les Fleurs du Mal* に描かれているような「現在のうちに復興させられた過去」 (BAUDELAIRE, 《Un Fantôme》, p. 39; SARTRE, p. 171) に、詩人の矛盾した態度をサルトルは指摘する。そして、こうした「あらゆる現在の価値を拒絶」 (p. 159) するだけで現在が存在することを否定しはしない詩人の態度は、変わらないものとしての過去、すなわち存在 (être) にボードレールの生が依存していることを示している。さらに、過去と永遠という概念の混同から、ボードレールは永遠なものとしての過去を現在において実現しようとしたと指摘される。このようにして、サルトルは現在と過去を共存させるような態度を、詩人の生と作品との中に認めている。

このように「嘆願書」にしる「懐古主義」にしる、サルトルがボードレールの生の失敗の中に見いだすのは、ある種の二重性である。《Mon Cœur mis à nu, XI (19)》で見いだされる運動する「緊張関係」にせよ、「懐古主義」的態度の批判から指摘される「現在を意識する過去」という概念にせよ、サルトルはボードレールのテキストの中に、互いに矛盾しあうものの同居を指摘するのである。すなわち、それは一つの関係性を構成する二項のうちから一項を選びとろうとするものではなく、そうした関係性を前にして主体はためらい、結果的に二項ともを共存させる態度である。

Ⅲ. ボードレールの成功と失敗

このようにサルトルにしる批評家たちにしる、ボードレールの生や作品の中に二重性とその運動性を認めている点で共通している。

ところで、4人の批評家たちのボードレール論は全て、サルトルの *Baudelaire* への反論として執筆された。リシャールに関してはこの点は一見ただけでは明らかではないが、それでも *Poésie et profondeur* の序文においてリシャールは、「われわれは今やあらゆる意識が何ものかの意識であることを知っている。[...]」ところで、私には文学が最大の簡潔さと素朴さすらもって存在を理解しようとする意識のこうした努力が裏切られるような唯一の場所であるように思えた⁹⁾と述べることによって、サルトル的存在論に対する自らの批判的立場を明確にしている。

また、彼らの論はサルトルの論の過剰に道徳的な観点を批判している点でも一致している¹⁰⁾。こうした批判も理解できるのであって¹¹⁾、結論部においてサルトルが、ボードレールが「経験を拒んでいたし、何ものも彼を外側から変化させにやっとなかったし、それに彼は学ぶということがなかった《[Baudelaire] a refusé l'expérience, rien n'est venu du dehors le changer et il n'a rien appris》」(p. 178)と述べて、詩人の態度を批判していることにも現れている。サルトルの強い否定的な調子は二度繰り返される《rien》という言葉からも窺える。

さらに彼らの論は、リシャールのボードレール論を除けば、サルトルの *Baudelaire* の発表後かなり早い時期に出されたものである。そうであれば、何故それほど素早い反応があったか、そして、批評家たちが擁護しようとしている「ボードレールの成功」とは何かという疑問が生じる。

彼らが述べる「ボードレールの成功」とは、*Les Fleurs du Mal* に対する高い評価であることに疑問の余地はない。しかし *Les Fleurs du Mal* の評価に関してはサルトル自身も否定してはいない。サルトルがこの作品に対して否定的な見解をとっているように思えたとしても、実際にはサルトルがボードレールの生を断罪し、自らの主張を根拠づけるためにしばしば作品を引用しているだけであり¹²⁾、作品の価値自体を直接否定しようとはしていない。それ故、サルトルが示す「ボードレールの失敗」とは、あくまで詩人の生の失敗である。もちろん作品自体を否定しなくともその著者の生を強い調子で断罪することは、作品自体をも断罪することだにとらえることもできる。実際、そうした解釈からブランショはサルトルが *Les Fleurs du Mal* の価値を過小評価していると主張している。しかしその一方で、リシャールがサルトルを引用しつつ自らの論を展開していることもまた事実なのである (RICHARD, p. 107)。

このように、批評家たちは「ボードレールの成功」を擁護しようとしているのであるが、

それと同時に、彼らは詩一般に対してサルトルのような道徳的な観点が適用されることを恐れ、それ故詩自体の擁護も行っている。先に引用したリシャールの序文の言葉はそのことを顕著に裏付けているし、バタイユも結論において、ボードレール的な詩の在り方が現代においては超越されており、ボードレール的な二重性の共存を超えて、詩は沈黙へと向かうのだ (BATAILLE, pp. 208-209) と、詩論一般へと考察を敷衍し、強い調子でサルトルの観点を批判する。この点が、彼らのあれほどまでに早い反応を説明づけているのではないか。

結 論

以上のように、サルトルは必ずしもボードレールの作品を過小評価しているわけではない。また作品の解釈についても、サルトルに反論する批評家たちとかけ離れているわけではないのである。批評家たちはサルトルの *Baudelaire* から「ボードレールの成功」を擁護しようとしているのであるが、サルトルが「ボードレールの失敗」と見なすものは、決して *Les Fleurs du Mal* の価値を否定するものではない。それ故に、パカリが指摘するように、サルトルはボードレールの作家としての態度に自分との類似性すら見いだしているのである。サルトルが批判しているのは、この「ボードレールの成功」という言葉が作品を超えて詩人の生にまで当てはめられることなのである。それ故に、詩人としての成功とは別に、人間としてのボードレールを読者に提示しているのであり、そのことによってむしろ、ボードレールの再考を促そうとしていたのではないだろうか。

註

- 1) Jean-Paul SARTRE, *Baudelaire*, coll. «folio», Gallimard, 1947 (éd. de 1975). 以下本文中においてはページ数のみを記す。また、ボードレールの作品に関しては以下を参照。Charles BAUDELAIRE, *Œuvres complètes*, tome I, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», éd. de 1975. なお本文中の訳は著者による。
- 2) Georges BATAILLE, «Baudelaire», in *La Littérature et le mal*, dans *Œuvres complètes*, tome IX, Gallimard, 1979, pp. 189-209; Georges BLIN, «Jean-Paul Sartre et Baudelaire», in *Le Sadisme de Baudelaire*, José Corti, 1948, pp. 103-140; Maurice BLANCHOT, «L'Échec de Baudelaire», in *La Part du feu*, Gallimard, 1949, pp. 133-151; Jean-Pierre RICHARD, «Profondeur de Baudelaire», in *Poésie et profondeur*, coll. «Points/Essais» 71, Éditions du Seuil, 1955, pp. 91-162. 以下本文においてそれぞれの作品をさす場合には、著者名とページ数のみ示す。
- 3) Cf. Michel CONTAT et Michel RYBALKO, *Les Écrits de Sartre*, Gallimard, 1970, p. 143.

- 4) 《À chaque minute nous sommes écrasés par l'idée et la sensation du temps. Et il n'y a que deux moyens pour échapper à ce cauchemar, — pour l'oublier: le plaisir et le travail. Le plaisir nous use. Le travail nous fortifie. Choisissons.》
(BAUDELAIRE, 《Hygiène, conduite, morale, 88.》, in *Journaux intimes*, dans *op. cit.*, p. 669.)
- 5) BAUDELAIRE, 《La Chambre double》, in *Le Spleen de Paris*, dans *op. cit.*, p. 280.
- 6) 『ボードレール』における「悪循環」のテーマについては、拙稿「『ボードレール』におけるサルトル的戦略」, 『広島大学フランス文学研究 15』, 1996, pp. 40-53 を参照。
- 7) SARTRE, *op. cit.*, pp. 37-38, p. 68.
- 8) 前途したブランの批評は、この《transcendance》と《transdescendance》という指摘を、ブランが解釈しなおしたものであろう。
- 9) RICHARD, *op. cit.*, p. 9: 《toute conscience est conscience de quelque chose》という言葉は、サルトル的現象学の定式としてしばしば用いられるものであり、サルトル自身フッサールの志向性の概念をめぐる考察の中で、フッサールの言葉として引用している。
Cf. SARTRE, 《Une Idée fondamentale de Husserl: l'intentionnalité》, in *Situations, I*, Gallimard, 1947, p. 31.
- 10) バタイユのテキストは、最初1947年の *Critique* 誌に《Baudelaire “mis à nu”》というタイトルで発表されたものであるが、そのタイトルからも明らかのようにテキスト全体は非常に強い調子でサルトルを批評している。Cf. BATAILLE, 《Baudelaire “mis à nu”》, dans *op. cit.*, pp. 442-445.
- 11) Cf. Jean-François LOUETTE, 《Sartre lecteur de Baudelaire》, in *Silences de Sartre*, Presses Universitaires du Mirail, 1995, p. 268: 《Admettons: c'est dans la logique d'une entreprise qui se sert de l'individu Baudelaire pour esquisser une morale.》
- 12) Cf. SARTRE, *op. cit.*; サルトルは《La Géante》における幼年期を懐かしむ詩人の姿をモラルの観点から批評する (p. 54)。また《L'Aube spirituelle》の最初の4行詩節を引用して、そこにボードレールの妄想を読みとり断罪している (p. 115)。
- 13) ボスケッティからの引用であることをお断りする。Cf. Anna BOSCHETTI, *Sartre et 《Les Temps modernes》*, coll. 《Le Sens commun》, Éditions de Minuit, 1985, p. 164.